

意見 ギリシア教父——問われるべきことは何か

荻野 弘之

前回シンポジウム「中世における聖書解釈——『創世記』をめぐる」(早稲田大学)の一提題者としては、いつもながらの時間的制約や「国際的」な開催形式のために、残された「宿題」の多さを痛感し、何よりもわが身の力量不足を顧みて自責の念は深い。だが学会のシンポジウムが連続企画である以上、前回の討議がいかにも不十分な結果に終わったにせよ、主にラテン教父の伝統に即した昨年の成果と問題点とを確認総括しないままで進められたことは残念であった。つまり「ギリシア教父の聖書解釈」というこの主題のもとで問われるべき問いが一体何なのか——ラテン教父との異同、あるいはギリシア教父内部での多様性、中世思想への影響関係、著作の類型、そしてまたこれらを通じて浮かび上がる異形の人々の謎——明確な始点(アルケー)をもたずに始まり、また逆にこのアルケーへと立ち返る志向もないまま進行し、提題と質疑を通じて終始焦点が定まらなかった印象を受けた。個々の質疑の中での興味とは別に、現時点でギリシア教父を問題にする難しさの反映でもあろうか。

水垣氏の提題は、とりわけ聖書解釈のなされる場(状況)、解釈者の条件(特に説教者と聴衆との関係)など細部の項目別に問題の所在を綜観してみせてくれた。タウマトゥルゴスや証聖者マクシモスなど後代の教父にも幅広く言及されたが、それにもかかわらずこれらを通じて浮かんでくるのは、ギリシア教父の聖書解釈の伝統におけるオリゲネスの巨大な影である。これはアレクサンドリア市の宗教的文化史的背景(E. M. Forster, *Alexandria: A History and A Guide*, London 1922)、膨大な聖書解釈や本文批評の実践、『原理論』や『ヨハネ伝講話』における方法論的反省などからして当然のことであろう。だとすれば、学派、時代、著作、主題によって多様な側面を見せるギリシア教父は、やはりオリゲネスを唯一の座標軸にして布置されるべきであろうか、あるいはまたカッパドキア派をも念頭に置いた別の視点がありうるのだろうか。

第二に「古代教父に内在的に」論じる氏の手堅い記述は、禁欲的な歴史研究に御自身の立場を限定しておられるように映ったが、教父のテクストを読み解く営みが逆に近代的(歴史的批判的)聖書学の限界を超越して、新たな聖書解釈を提起する、そう

いう意味で教父を現代に（再び）生かす道はないのだろうか。いささか性急の誹りを免れないかも知れないが、筆者としてはむしろこうした展望をこそシンポジウムに期待しているのだが。

篠崎氏の提題は、以上の問題意識とも密接に関係してくる。氏は「園のドラマ」を題材にニュッサのグレゴリオスの『創世記』解釈の「正当性」を検討するが、現代日本人がギリシア教父のテキストに直面して覚える違和感を正直に吐露した、その意味では提題者の誠実さに感銘すら受けた。ただその基調は、法的／倫理的／予型論的解釈がキリスト教信仰によるいわば「理論負荷的」読み込みとしてテキスト本来の読みを歪め、物語作者（ヤハウィスト？）の意図を逸したと断罪して、教父の負の側面を強調する結果となった。この点で氏の論調は、無自覚にか意図的にか、近代的聖書学の主張と軌を一にする。しかし初めから「〈予めの枠組〉を持ち込まない」読みが果たして可能なのか、歴史的批判的方法がそれを保証するのか、また可能だとして、それにどれほど意味があるのだろうか。読者（解釈者、研究者）の側の主体性（とその変容）を括弧に入れた聖書解釈の行き着く先は、結局オリエント諸民族の断片的な宗教思想を歴史的に積分した代物以外ではあるまい。それは何やら死体解剖の所見に思えてならない。テキストの解釈一般と聖書の解釈は同じなのか、つまり通常解釈とは異なる特権的なテキストがはたして存在するのだろうか、われわれの手にしている「聖書」が真に生命をもった言葉＝〈聖書〉となるのはいつの日のことなのであろうか

意見

所与としてのテキスト

田島 照久

提題1「聖書解釈における正当性の問題——伝統か〈時のしるし〉か——」において提題者は発表の論旨に沿って、「テキストの不適切な読み込み」の例として、『創世記』冒頭の“in principio”の解釈に「イエス・キリスト」を持ち込むことを挙げ、これなどは到底承認出来る解釈ではないと語られた。それに対して筆者は舌足らずの反論めいた意見を述べたが、改めて提題者が提起された問題全体について考えてみたい。

提題の骨子をまとめれば、「聖書」を「テキスト」としてとらえた上で、「テキスト